

中浜 東一郎をめぐる医療人脈（その1・後編） 森鷗外と東一郎 ―若き日の交友関係を中心に―

塚本 宏

イ 衛生学の恩師、ペッテンコーフェル教授

鷗外は、陸軍での3年間、持ち前の実力と才能を発揮し、さらに周囲の支援、幸運も重なって念願のドイツ留学が決定する。明治17年（1884）8月、横浜を出港してドイツに向かう。その目的は「陸軍衛生制度調査および軍陣衛生学研究」であった。

一方、東一郎は、新設の地方医学校の校長・教授を歴任の後、医療に関する官僚機構の中核たる内務省衛生局（もちろん局長は長与専齋）勤務を命ぜられ、鷗外を追うように翌18年11月、ドイツ留学の命を受けた。目的は、「衛生学中飲食物料に関する事項調査伝習」であった。期せずして、二人とも留学の目的が衛生学の調査・研究であることにご注目願いたい。当時、国民の間に猖獗をきわめていたコレラ、赤痢などの伝染病対策（脚気も伝染病の一種と考えられていた）、上下水道に関する研究が重要視されていたので当然だと言えよう。

ここで、明治初期、つまり19世紀後半における衛生学の位置づけについて若干の解説を試みることにしたい。¹⁰⁾

伊達一男の言葉を借りるなら、「初期の衛生学という学問は、衛生行政ばかりでなく、細菌学という、当時の医学ではもっとも新しく、しかも極めて厳密な方法論を要求した、まことに『エキサクトな』学問であったのである。医学は、この時代以降、いわば細菌学的医学時代とでも呼ぶべき時代を現出し、細菌学ははなばなしい時代の脚光をあびた学問であって、その細菌学をうちに含む衛生学は、明治に日本が要求し、また当時世界の医学のなかでも、もっとも新しく、若い青年医学徒の興味をひいた学問であったのである」。

明治19年1月、ドレスデン在住だった鷗外は、ベルリンから来た東一郎を停車場に出迎え、ドイツで初めて落ち合った。東一郎は、ドイツへ着いたときはこれ以上の愉快はなかったと鷗外を相手に手放して喜びを表し、鷗外はホテルを世話して酒場に案内し、東大の同期生同士は西洋の地で余人を交えず語り合った。さらに、その年の11月に今度は、ミュンヘンで再会することになった。3月からペッテンコーフェル教授のもとで学んでいた鷗外と、同じ教授に付いて机を並べる研究生活に入ったのである。東一郎は留學生活の大半をペッテンコーフェル教授の教室で過ごし、鷗外も1年1カ月余の期間、同教授に師事している。二人はペッテンコーフェル教授を仲立ちとした、いわば同志であった。¹¹⁾

では、ペッテンコーフェル（Max Joseph von Pettenkofer, 1818－1901）とはどのような学者だったのか。¹²⁾

近代衛生学の開祖の名に恥じない、この分野での世界的な権威で、細菌学のコッホと並んで当時の医学界をリードした巨匠であった。ミュンヘン大学の衛生学 Hygiene 教授に就任（1865年）してから約30年にわたり教授職を務め、ミュンヘン市を衛生都市に変貌させた功績でミュンヘン市の「名誉市民」と仰がれたほどの有名人でもあった。

彼は、化学、とくに有機化学の研鑽を積んで、当初は「医化学」の教授となった。優れた生理化学者・カール・フォン・フォイトと協力して開発した「呼吸計」を利用して近代的な栄養学を樹立した後、食

物を皮切りに、空気、土壌、水、衣服、住居、などの環境諸条件の健康への影響について、実験化学、応用生理学を駆使して、今日、言うところの「環境衛生学」を確立させたのである。コッホから提供されたコレラ菌の純培養液を飲むという危険な人体実験をみずから行って、伝染病説を否定し自説の「土壌汚染説」を唱えたという有名なエピソードの持ち主でもある。

日本人の弟子、第一号は緒方正規（明治13年、東大・医学部を首席で卒業、帰国後直ちに日本人として初代・衛生学教授に就任）、つづいて鷗外、東一郎、小池正直、坪井次郎（後年、京都大学・医科大学の初代学長）らがいる。

残念ながら、ペッテンコーフェルの晩年は、きわめて悲劇的である。性格的に感情の起伏が激しく、プライドが高いうえに首の腫瘍や不眠症に悩み、ピストル自殺した（明治34年2月）。東一郎が呼びかけて、在京の緒方、鷗外、小池とともに4名連名で、孫のモーリッツあてに弔辞を送っている（「東一郎日記・明治34年4月21日」）。

ウ 帰国後の活躍と人事面での葛藤

鷗外、東一郎、小池の同期生、3人は、ドイツ留学を終えて、それぞれ、明治21年9月（鷗外）、22年2月（東一郎）、23年12月（小池）の順に相次いで帰国し、内務省衛生局、陸軍軍医部のエリート官僚として活発な活動を始めます。

東一郎は、内務省直轄の東京衛生試験所の兼務も命じられ、翌23年6月には所長に就任（兼務のまま）している。コレラ、赤痢など伝染病の防疫、病原検索や牛痘苗の精製をチェックすることを業務とする公衆衛生の第一戦機関の長という重要な任務を担っていた。東一郎自ら陣頭指揮でコレラや天然痘流行地の実地調査に東奔西走したのである。また、中央衛生会の幹事も務めるなど、衛生行政関係の重責を果たす活躍をしている。

この時期の鷗外の業績として重要なものは、衛生学教科書の著述・編纂である。まず、帰朝直後の明治22年3月には陸軍軍医学校から刊行された「陸軍衛生教程」（当時、陸軍軍医学校長だった石黒忠恵が序文を書いている）がある。石黒が、衛生学の全体像について良く整理された知識の持ち主だった鷗外に命じたことは明らかである。

続いて、東一郎と小池の協力を得て、明治22年11月から約5年にわたり雑誌に連載された、ルブネル Max Rubner の教科書を底本とする「衛生新論」が出来上がる。さらに「衛生学大意」を経て、当時、日本人の手によって書かれた世界的水準の大著「衛生新篇」（明治29年刊行）が完成するのである。鷗外の衛生学者としての面目躍如たるものがある。明治・大正期の文豪「漱鷗」として夏目漱石と並び称される鷗外が衛生学者としても立派な業績を残していることにご注目願いたい¹³⁾。同時に、その同志の一人として協力した東一郎も忘れてはならないであろう。二人は、明治24年に揃って医学博士の学位を授与されている。

中央官庁の高級官僚としての地歩を着実に固めつつあるかに見えたこの頃、東一郎の前に暗影を投ずかのような転換点が迫っていたのである。当時の衛生局には、東一郎とともに、その学術的能力、政治的手腕において遙かに彼を凌駕していたことが後年の歴史が証明することになる、二人のライバルがいた。後藤新平と北里柴三郎である。「東一郎日記」から引用して説明することにしよう。「東一郎日記」から抜粋して説明してみよう。

「午前長与を其邸に訪ふ。……長与曰く不日後藤帰朝する筈なれば後藤の位置を替へ北里を内務省に

入るを良しとすと。余は後藤新平を衛生局長となすの意なるかと疑ふも深く之を究めず。……」（明治25年6月2日）

「昨日後藤新平衛生局長に任せらる、北里も亦内務技師に任せらるゝ趣なり。新平の得意憶ふへし、明治政府の人を登用するの明なき遺憾なり。」（同年11月18日）。

このように東一郎は、正直にかつ感情的に後藤をライバル視して上司の長与専齋が自分ではなく後藤を後継者に抜擢した悔しさを告白している。その後、後藤はいったん、相馬事件で収監されるものの局長に復職をはたし、ここに東一郎の局長昇格の夢は断たれたのである。

後年、鷗外もいわゆる「小倉左遷」を体験するが、この頃、重大な人事問題が秘密裏に持ち上がっていた。これまた、「東一郎日記」を引用すると、「……（鷗外と約束していた）三河町の西洋料理屋に行く。森は先つてあり秘密事件を告ぐ。曰く昨年衛生局長後藤新平非職となるや都築馨六は森林太郎を内務省に招き密に参事官室に勤務する事を勧めたり、森は二回程内務省に趣き相談する処あり、後衛生局長に転せんとするの相談あり。然るに兼務にあらず局長専務となるへき筈なりと陸軍次官の話なれば石黒忠憲等の大に斡旋する所あるにも係らず遂に立消となれりと。……」（明治27年4月13日）

いかなる事情で持ち上がり、立ち消えとなったか、皆目推測できないのであるが、「もしも」森鷗外衛生局長が実現していたなら、彼の人生もまた大きく変わったことであろう。

組織人の常とは言え、人事問題こそはその人の生涯を決定付ける一大事であると同時に「運・不運」という要素も大きいことを物語っている。

東一郎が、官から民へ転じた後（明治生命入社は明治29年4月）ことになるが、人物鑑定に優れた板鷗外が、東一郎を評して「無邪気で、先づ処世には迂拙な男だが、この男を好いている」としているが、彼に好感を抱いていることは確かであり、お互いに心情を吐露して親密な交流ぶりが伺えよう。

予定の紙数もかなり超過しているので、今回は若い時代の東一郎、鷗外の交友関係に留め、鷗外だけではないその他数々の人脈については、次回以降に書き続けることをお許し願いたい。

註

- 10) 丸山博『森鷗外と衛生学』（勁草書房、1984年）と、伊達一男『医師としての森鷗外』（績文堂、昭和56年）の「5 衛生学への志」を参照して要約した。
- 11) 山崎光夫『明治二十一年六月三日 鷗外「ベルリン写真」の謎を解く』（講談社、2012年）、第3章「ジョン万次郎の息子 中浜東一郎」による。なお、著者は、医療小説を多く手掛けている作家（新田次郎賞も受賞）で、森鷗外記念館評議員を務めている。
- 12) 川喜多愛郎『近代医学の史的基盤・下』（岩波書店、1977年）の第39章「十九世紀衛生学の諸問題」から引用。
- 13) 鷗外の衛生学教科書については、前述の丸山、浅井、伊達らが、その著書のなかで、詳細に考察・検討しているが、当時の衛生状態と現今のそれとでは大きな相違があるので、ご参考にはならないと考え割愛することとした。